

ルネッサンスの光と影——ロレンスと近代

古我正和

〔抄録〕

ルネッサンス以来、ヨーロッパは他に見られない近代化をとげたが、二十一世紀に入って、その近代の意味が問い直されている。ロレンスは二十世紀の初めにすでにこのことに気づいていた。彼はこのような近代の根底をなすものの根源を、ルネッサンスにさかのぼって考える。ロレンスによれば、ルネッサンス以前には人間と自然との間に有機的なつながりがあったが、ルネッサンスと共に人間の自由が重んじられるようになった結果、人間は自分の知性を買いかぶり、自分以外の自然や動植物をないがしろにするようになる。この考えは彼がイタリアへ足を踏み入れることからより鮮明なものとなり、彼の思想の核となった。本論ではこのことを現代のフランス哲学者M. フーコーの所説を参照しながら、イタリアでの彼の記述と、彼の晩年の問題小説『死んだ男』を中心として探ってみた。

キーワード ルネッサンスの検証、ロレンスのルネッサンス観、二十一世紀の生き方

I

ヨーロッパにルネッサンスが起こって以来四百年から五百年が経過した。その間ヨーロッパは中世から堰を切ったように近代化していき、その持ち前の手腕を発揮して世界経営に乗り出す。世界各地に近代化の波が押し寄せ発展して現代にいたる。そして二十一世紀に入った今、中世への回帰が叫ばれルネッサンスに始まる近代の意味が問い直されている。ルネッサンス以来人間が築いてきたものが、二十一世紀にいたって新しい意味と問題を持つようになってきたからである。特にソ連邦の崩壊以後資本主義の一人舞台となった後、その基本原理である個人の利益の追及は限度を知らないものとなり、拝金主義は見にくいまでの様相を呈している。筆者は以前その著『ロレンス研究——西洋文明を越えて——』において、D.H.ロレンス (Lawrence, 1885-1930) の文明観を通してヨーロッパ文明の見直しを試みたが、本論では特にヨーロッパの発展の起爆剤となったルネッサンスに焦点を当て、今まで考えられたようにルネッ

サンと言わば光の部分ではなくその影の部分に焦点を当てながら、この事を考えてみたいと思う。

II

現代を眺めてみるとロレンスが二十世紀の初めに語りかけたことが一つの予言としてわれわれに響きわたってくる。彼はこのような近代の生き方の根底をなすものを、ルネッサンスにまでさかのぼって考えた。ロレンスによれば、ルネッサンス以前には緑が豊かで鳥が甘い声で鳴き、昼と夜が変わらずあってもものが死に絶えることなく、人間と自然との間に有機的なつながりがあった。ところがルネッサンスと共に人間の自由の尊重が叫ばれ、それが一人歩きしはじめる。人間が自分の知性を買いかぶり、自分以外の自然、動植物と自分とを画然と区別するようになるのである。

このような考えも初めは鮮明なものではなかった。それはロレンスが母国イギリスからヨーロッパの他の地域へ足を踏み入れることからはっきりしてくる。彼はまず人々の生き方が西欧と北欧とでずいぶん違っていることに気がつき、その源をルネッサンスへとさかのぼっていくのである。

ロレンスは二十世紀の初めイタリアを訪れた時、イタリア人の考え方を、同じヨーロッパの北部に属するイギリスとはずいぶん違ったものだと述べている。すなわち、中世のキリスト教ヨーロッパには、全域にわたって精神（mind）と感覚（sense）とが共存していたが、ルネッサンスの時もしくはそれ以後に、イタリア人はその生活の基本が上のmindにあたる知的意識よりもむしろ、闇に象徴される感覚、感覚的陶醉にもとづくようになったというのである。ところが、ルネッサンスの進行とともに北欧においてはそれと全く逆の方向へ向かい、人は具体的なものを伴わない自由、単に観念的な自由を求め続け、神の言葉を絶対的なものとして受け取り、自分たちが神の言葉の通りになった時人は自由になったと思ったという⁽¹⁾。ここにはロレンス独特の神の言葉や自由に対する否定的な考えが見られる。

ところで神の言葉や自由とは、一体どのように歴史に表れ、民衆はどのようにそれを受け取ったであろうか。神の言葉を民衆に伝える聖書は、最初ヘブライ語やギリシャ語だったものが、ローマ時代になってラテン語に訳され、中世にはそのラテン訳を通して民衆に語られていたが、ルネッサンスより後、1611年になってようやくジェームス I 世（James I, 1566-1625）による欽定英訳聖書（*The Authorized Version of the Bible*）が刊行された。こうしてイギリスでは17世紀から18世紀の頃の啓蒙時代に至って、聖書はようやく当時の一般民衆の言葉に翻訳されたのである。これはすばらしい散文訳であり、民衆に直接読まれて後世に多大な影響を与えた。このことを日本における仏典の翻訳とその一般民衆への影響とを比較して考えてみると大変興味深い。日本でも仏典の翻訳がなされてはいるが、民衆は翻訳されているという事実さえ知らない場合が多く、また自分で読むために平易な翻訳を望むこともないのである。

さてキリスト教の聖書の方は、こうしてルネッサンスの人間の探究心に答える形で、一般民衆にもよく分かる日常語に訳され、それを通して宗教精神、続いて人間精神の理想が探究された。読書階層の拡大も学士院の英語改革もこうして起こるのである。また書き言葉の改革の他に、教会の説教者の文体さえも、平明で修辭的虚飾を捨てることが求められた。

このように「読み解く」ことを重んじたイギリスあるいはヨーロッパでは、日本の民衆が梵語の仏典をそのまま受け入れるようには受け入れられず、それを自分みずから解読しようとしたのである。これがルネッサンスのもう一つの隠れた意味だった。つまりルネッサンスの負の遺産、マイナスの遺産だったのだ。ロレンスの言いたかったのはこのことである。このことは思想史の上ではプラスの主旨とは逆の受け取り方であるが、ここではそのマイナス面を考えてみたい。

中世では民衆は教会で聖書や讚美歌を声を出して読み歌うことはあっても、その文字を理解することができなかった。教会では牧師がラテン語を「読み解」いて民衆に語り聞かせた。それを助けるための絵がキリストの物語として絵巻物などで表された。宗教上のこの絵巻物は今の日本でも見られる。もちろんヨーロッパでも今も絵巻物はあるが、その教典の言葉は大いに違っているのである。

その違いはルネッサンスの有無と大いに関係があると思われる。ヨーロッパが言葉にこだわり出したのは、ルネッサンスと関係があるからである。いやルネッサンスよりもむしろ聖書そのものが言葉と関係が深かった。聖書の初めには「初めに言葉ありき」とあるではないか。そもそもキリスト教そのものが言葉に敏感な宗教だった。だからこそ、キリスト教のおひぎ元でルネッサンスが起こったとも言えるかも知れない。とにかくヨーロッパでは言葉に対する意識が他よりも異常に強かった。

ルネッサンスはヨーロッパだけにはっきりとしたかたちで表れた現象である。世界の他の地域でも、ルネッサンスがゆっくりとした形で進行したとは考えられるであろうが、ヨーロッパの場合はそれが急激な形で、あらゆるものを巻き込んで起こった。

言葉に対するこの異常な関心は、しかし、人類の歴史において大きな意味を持っていたのだ。それは人類に現在の物質的な幸福をもたらしたものであった。だがその反面、今問題になっている、マイナス面をも同時に含んでいたのである。

ロレンスが中世について言ったことはこのことだった。日本では昔、和讃とか唱和などで意味を考えずにただただ唱えることだけをした。今でも念仏がそうである。この場合、その内容よりもむしろ唱えていることに意味があるのであって、それがそもそも精神・感性の統一と関わるのではなからうか。

ルネッサンスで人間が獲得した理性よりもこの感性こそが、今求められている。ルネッサンスにからんでもう一つ興味深いのは、「近代」を契機にヨーロッパでは人間の生き方が宗教から離脱を始めたのに対して、他の地域、例えばその最も典型的な例で言えばイスラムの世界で

は、宗教への帰依の程度は、歴史の経過の中でそれほど急速には薄まることはなかったということである。これはどうしたことであろうか。ここで考えられるのがルネッサンスである。ルネッサンスが起こったのはヨーロッパだけであった。そして上の「近代」をルネッサンスで置き換えてみると、何らかの意味でルネッサンスがなかった地域では、このように宗教への帰依が今にいたるまで強く持続しているのである。同様のことがインドの各宗教間の確執やカーストの健在、ミャンマーの社会生活を支配する強大な佛教慣例などに見られる。われわれはともすると時代が進むことが近代となること、宗教から離脱することだと思いがちだが、世界には上で見たようにそれでは解決のできない実情がある。

さてロレンスがイタリア紀行で言っている神の言葉についての考えに戻ると、ここで彼の言う神の言葉は、肉体や動物的性質と対極をなす抽象的、観念的なものとして述べられている。ロレンスはこのようなものではなく、神と人間との直接の血のつながりを求めたのであった。

このことをロレンスはルネッサンス美術についてみている。ルネッサンス美術の中には、キリスト教をテーマとした美術が多く見られるが、ロレンスにとってそれらは必ずしも真の人間の・宗教的精神を伝えてはいない。例えば「糸杉」(‘Cypresses’) という詩の中では、ルネッサンスの画家であるレオナルド・ダ・ヴィンチ (Leonardo da Vinci, 1452-1519) のモナリザの微笑でも、エトルリア人の純粋な微笑にはかなわないと言っていて、ダ・ヴィンチに対しては余り高い評価はしていないと思われる。

ルネッサンスがその名にふさわしい本来の持ち味をやっと発揮するのは、ルネッサンスの後半にいたったのことだとロレンスは言う。この担い手はボッティチェリ (Botticelli, 1444-1510) とミケランジェロ (Michelangelo, 1475-1564) の二人であった。そして知的意識を重んじるキリスト教運動全般に背を向けて、ミケランジェロが突然向かっていったその肉体的方向に、ロレンスは至高の神性を見いだしたのだ⁽³⁾。これがロレンスの考える、この二人がルネッサンスに対して持つ意味であった。そしてこれが北ヨーロッパにはない、暖かい黙示の状態と通じるものであることはもちろんである。

ルネッサンス以後、知的意識は、遥か彼方にそびえるアルプスの山々の光のように南欧の人々から離れた存在となり、それと対照的な闇が南欧の地上の人々の感覚を支配することになる。そして感覚はそれ自体が自己目的となって、南欧の人々に消費あるいは浪費をもたらす。知的精神は同様に北欧の人々に創造をもたらすことになる。イギリスのヴィクトリア時代の勤勉で典型的な資本主義に代表される北欧の在り方が「創造的」で、イタリアに見られる方が「破壊的」であるとも言えるのである。

このように、ルネッサンス以後の南ヨーロッパと対照させて、ロレンスは北ヨーロッパの在り方を浮彫りにしていく。そして感覚の宿す闇は人間の暖かい胸の中にあるのに対して、知的精神が行う創造は遥か遠くの山々の光のように、人間からはるかに隔たった冷たいものとなり、それが二十一世紀に持ち越されるのである。

III

こうしてルネッサンスの最大の成果である自由と民主主義の考えにいきつく。先ず自由について考えると、前章でもすこし触れたが、自由はルネッサンスを契機にして生まれた、肉体を離れた抽象的なものであるとロレンスは言う。そしてこれは上で見た、イタリアの山頂の雪に象徴される、北欧を支配してきた人間の血の通わない抽象的な精神であった。

ところでこの自由と裏腹の関係にあるものが狂気である。フーコー (Michel Foucault, 1926-84) によればルネッサンス以前には、超人間的であると同時に自然的なものを含んだ「狂気」が現実にはあったが、ルネッサンスと共にそれはなくなった。⁽⁴⁾ ここにある狂気は上でみた抽象的な自由の正反対であることは興味深い。実はロレンスの自由観はこのことと関係があるのである。すなわちルネッサンス以前には人間の精神活動は、中世の封建社会のもとで一見制限されたと考えられ勝ちであるが、やはりその活動は営まれ、それは「狂気」という形で処理されたと考えられるのである。ルネッサンスでもその初期にはまだまだ中世の痕跡が残っており、その時の科学者たちはしばしば狂気にとりつかれたとして断罪されたことをみても、このことは明らかである。こう考えると、フーコーが次いで、ルネッサンスの人間主義は、人間の拡大ではなく減少であったということに言及しているのを、容易に理解できるのである。彼が『狂気の歴史』の中で言っている狂気とは、神が人間を支配していた中世から近代にかけての永い時代のものであって、神が持っている真理に照らしてみると人間の次元に属するものすべては狂気にほかならず、人間はあらゆる事について自分の狂気的な興味に執着したのだというのである。⁽⁶⁾

ルネッサンスはこのような狂気を追及する自由を人間から奪ったとロレンスもまた考える。ルネッサンスは人間の解放と同時に、思い上がりと傲慢とを許したが、ロレンスが言っているのは、この人間の思い上がりと傲慢に関わることなのである。ちなみにこの間の経緯をフーコーは次のように述べている。

La folie a cessé d'être, aux confins du monde, de l'homme et de la mort, une figure d'eschatologie ; cette nuit s'est dissipée sur laquelle elle avait les yeux fixés et d'où naissaient les formes de l'impossible. L'oubli tombe sur le monde que sillonnait le libre esclavage de sa Nef : elle n'ira plu d'un en-deçà du monde à un au-delà, dans son étrange passage ; elle ne sera plus jamais cette fuyante et absolue limite. La violà amarrée, solidement, au milieu des choses et des gens. Retenue et maintenue. Non plus barque mais hôpital.⁽⁷⁾

上のことから、我われが今までに学んだ常識的なこととは違ったルネッサンスの一つの意味が

考えられる。それはロレンスを研究していく中から明らかになることで、ルネッサンスの影の部分である。ルネッサンス以後狂気を包み込む影がなくなり、それを収容する「阿呆船」⁽⁸⁾はなくなり、狂気は白日のもとにさらされ排斥されるに至った。これがロレンスのいう「自由」論の背後にはある。ロレンスは現代のフランスの哲学者フーコーが20世紀後半に行なったことを20世紀の初めに文学の世界で成し遂げたのである。その意味で彼はまさに予言者的であった。

ロレンスがこのようなことを発見したのも、彼がイタリアへやってきて、南ヨーロッパを通して北ヨーロッパを見た「傍目八目」的な結果であった。彼は北ヨーロッパが向かっている状態を「文明の崩壊現象」と呼んだのは、このことであった。

自由に対する考えはさらに民主主義批判へとひろがっていく。これは‘BARE FIG-TREES’という詩の中に見られる。いちじくががむしゃらに他の助けを借りずただひとりで天の上へ上へと伸びていく様子は、さながら指導者で先駆者のようであり、「市民」、「民主主義者」にたとえられている。このことに関して詳しくは、別稿にゆずりたいと思う。

民主主義については、『虹』(*The Rainbow*, 1915)の中でアーシュラ(Ursula)が、民主主義のもとでは必ずしも人々は皆民主的であるわけではなく、社会の上層の貪欲で醜い人びとが利己的な振る舞いをしてしていると、スクレベンスキー(Skrebensky)に述べている⁽⁹⁾が、市民も含めて、このことをロレンスがルネッサンスを起点として起こったマイナス面と考えていたことが分かる。アーシュラはこの他にも、イギリス式民主主義にもとづく植民地政策を批判している⁽¹⁰⁾が、このことはその著者であるロレンスが狭いイギリス人ではなく巨大な世界市民、文字通りのコスモポリタンだったことを示している。

IV

それでは、ロレンスの考えるこのようなルネッサンス観とその結果として人間に起こった変化を、他の彼の作品の中にもてみよう。

本論の第II章で考えた「神の言葉」からの脱却が描かれたのが『死んだ男』(*The Man Who Died*, 1931)においてであった。ここでは復活したキリストをルネッサンスよりも後の現代に再登場させ、今までの宗教の指導者としてのあり方を反省させている。この作品を読んでいるとaloneという言葉がしばしば出てくるが、この言葉は死んで復活した人物がまれにみる存在であるという事のほかに、キリスト教一色に塗りつぶされたヨーロッパの中であって、孤独な戦いを強いられる者の持つ気持を同時に示している。

また死んだ男がマグダラのマリアを見た時、次のような謎めいた描写がなされる。

He looked at her, and saw she was clutching for the man in him who had died and was dead, the man of his youth and his mission, of his chastity and his fear, of his little life, his giving without taking.⁽¹¹⁾

上に見られるlittle lifeやgiving without takingなどは、今までの考察から考えると容易に理解することができるのであって、little lifeは「ちっぽけな生き方」の意味であり、彼の生前の、若い頃の彼の在り方で、伝道と純潔と神への恐れと、giving without taking、すなわち無償の行為を示している。このような事を、ロレンスは「ちっぽけな」と言って批判しているのである。

さらにまたlittle peopleやlittle dayが次に見られる。

He had come back to life, but not the same life that he had left, the life of little people and the little day.⁰²

また復活した男が新しい関係を結ぶことになる女性に仕える奴隷たちの、漁業をしているのを見た時の男の様子は次のようである。

It was the life of the little day, the life of little people. And the man who had died said to himself: “Unless we encompass it in the greater day, and set the little life in the circle of the greater life, all is disaster.”⁰³

ここにはっきりと、littleとgreatの区別がなされる。また先にみたgiving without takingと関連して、次の文のthe greed of givingという言葉も注意すべきである。彼はその女の世俗の博愛、無償の愛を感じとって、彼女から距離を置こうとする。

And in his heart he knew he would never go to live in her house. For the flicker of triumph had gleamed in her eyes; the greed of giving.⁰⁴

これはルネッサンス以後に出てきたヒューマンイズムのいき過ぎからくる、偽善の押しつけということであって、前のgiving without takingと同類の行為である。

これらのことは男が死ぬ前に自分が行なった伝道に対する自省の気持ちから述べられたものであるが、死んだ今となっては、男は次のように変わっている。

“Now I belong to no one and have no connection, and mission or gospel is gone from me. Lo! I cannot make even my own life, and what have I to save? ... I can learn to be alone.”⁰⁵

ここに死んだ男の今の状態が見られる。つまりlittle lifeから脱却して、誰にも属せず、その女性にさえ属せず、先に述べた全くのaloneとなることなのである。特に伝道についても、次のように男は述べる。

“How good it is to have fulfilled my mission, and to be beyond it. ...”⁰⁶

伝道の仕事に休止符をうち、今やそれを越えたものを追及しながら生きるのである。

また同時にそれは「私」も他より干渉されず、他にも干渉せずそのままにしておくことである。

Now I can be alone, and leave all things to themselves, and ...⁰⁷

これは挫折では決してない。懸命の努力の後の敗北でもない。またその中で彼は次のようになることができるのである。

...and enjoyed his immortality of being alive without fret. ...and he smiled to himself with pure aloneness, which is one sort of immortality.⁰⁸

すなわちaloneとはいらだたず、不死身で生きることだ。また次の引用には、今まで述べてきた神の志に仕える社会の現実が述べられ、それは人を強制させようとするものだという。

It was the mania of cities and societies and hosts, to lay a compulsion of love on all men.⁰⁹

そしてこれからの脱出がaloneなのだ。このようにロレンスとその初期にイタリアで考えたことが、晩年にまで及んでいることが分かる。

V

以上、ロレンスのルネッサンス観を作品の中でながめてみた。しかし自由や民主主義の墮落に対して警告したのはロレンスが初めてではない。それは古代ギリシャのアテネの政治の中に、「衆愚政治」としてすでに見られた。また19世紀前半に、トクヴィル (Alexis de Tocqueville, 1805-59) はアメリカにもその傾向があることを、はっきりと認識していた。すなわち、民主主義は人々を身分や職業の枠から解き放ち、平等で同質な個人として解放したけれども、その平等化・同質化の力は同時に人々の個性や異質性を生み出す基盤を掘り崩した。他方伝統や宗教の権威は失われ、個人は自己を越える権威を見出せないために、自己の理性の判断に依存せざるを得なくなる。ここに民主主義特有の権威、すなわち、人類、人民、社会、人間性といった一般的な観念が登場し新しい形の「専制」が、解放されたはずの個人を支配す

るようになる⁶⁹⁾というのである。

この考えはロレンスの民主主義論に大いに関係している。人間の悪平等に対する警告である。ロレンスの晩年のエッセイ『黙示録』(Apocalypse, 1931)にも次のような記述がある。

In democracy, bullying inevitably takes the place of power. Bullying is the negative form of power. The modern Christian State is a soul-destroying force, for it is made up of fragments which have no organic whole, only a collective whole. In a hierarchy, each part is organic and vital, as my finger is an organic and vital part of me. But a democracy is bound in the end to be obscene, for it is composed of myriad dis-united fragments, each fragment assuming to itself a false wholeness, a false individuality. Modern democracy is made up of millions of frictional parts all asserting their own wholeness.⁷⁰⁾

民主主義になると弱い者いじめが権力にとって変わるということ、教門政治では有機的なものが支配しているということ、民主主義では各自がその全体性を主張してやまぬというのである。こうしてロレンスを書いた『黙示録』は、聖書中のヨハネの『黙示録』が「弱いもの」に喝采を浴びせている本だという。また次のようにも言う。

There's no getting away from it, mankind falls forever into the two divisions of aristocrat and democrat. The purest aristocrats during the Christian era have taught democracy. And the purest democrats try to turn themselves into the most absolute aristocracy. Jesus was an aristocrat, so was John the Apostle, and Paul. It takes a great aristocrat to be capable of great tenderness and gentleness and unselfishness: the tenderness and gentleness of *strength*. From the democrat you may often get the tenderness and gentleness of weakness: that's another thing. But you usually get a sense of toughness. ...The religion of the strong taught renunciation and love. And the religion of the weak taught *down with the strong and the powerful, and let the poor be glorified.*⁷¹⁾

イエスも使徒ヨハネもパウロも貴族主義であって、民主主義はキリスト教時代の最も純粋な貴族主義者が説いたものだが、今ではもっとも徹底した民主主義者が絶対的貴族主義へ成り上がろうとしている。民主主義者からときおり期待しうるものは弱さからくる優しさと穏和にすぎない。それはイエスたちが持っていた、強さからくる優しさと穏和の精神とは似て非なるものであって、通常、民主主義者に感じられるのは、片意地と硬さにすぎないというのである。

これがロレンスの民主主義論である。このような考えもロレンスだけではない。ヴァージニア・ウルフ (Virginia Woolf, 1882-1941) は『ダロウェイ夫人』 (*Mrs. Dalloway*, 1925) の中でクラリッサ (Clarissa) と対照的な存在として、精神科医のブラッドショウ (Bradshaw) の夫人を描いている。クラリッサが死を意識しながら生きているのに対し、ブラッドショウ自身は愛や社会奉仕、慈善などに熱心なのだが、夫人はそれのお先棒を担いでいる。ヴィクトリア朝の風潮から、世間の困った人々を救うことのために、愛、社会奉仕、慈善がもてはやされたのだ。それをウルフはSnobbizmとして受け取っているのである。

以上、ルネッサンスから始まって現代にいたる自由や民主主義の問題点を、ロレンスの目を借りてながめてみた。近代化の進む中で、現在新たな問題が起こってきている。ロレンスが20世紀の初めに考えた事の中に、それを解決する糸口が発見できれば幸いである。

[注]

- (1) Cf. D. H. Lawrence. *Twilight in Italy*, Penguin, 1972, p.41. Cf. Masakazu Koga. *A Study of Lawrence - Beyond the Western Civilization -*. Osaka Kyoiku Toshō, 1996. pp.184-185.
- (2) Cf. Vivan de Sola Pinto and Warren Roberts (ed.). *The Complete Poems of D.H. Lawrence*. London: Heinemann, 1972. Vol.1. p. 297.
- (3) Cf. *Ibid.*, p.41. Cf. M. Koga. *op.cit.* p. 186.
- (4) Cf. Michel Foucault. *Histoire de la folie à l'âge classique*. Paris: Gallimard, 1972. p. 53.
- (5) Cf. *Ibid.*, p. 41.
- (6) Cf. *Ibid.*, p. 42.
- (7) *Ibid.*, p. 53.
- (8) Cf. *Ibid.*, pp. 18-19.
- (9) Cf. D. H. Lawrence. *The Rainbow*. ed. Mark Kinkead-Weekes. Cambridge: Cambridge U. P., 1989. p.427.
- (10) Cf. M. Koga. *op.cit.* p. 188.
- (11) D. H. Lawrence. 'The Man Who Died' p. 18, in *The Short Novels*. Heinemann, 1963. Vol. 2.
- (12) *Ibid.*, p. 31.
- (13) *Ibid.*, p. 36.
- (14) *Ibid.*, pp. 14-15.
- (15)、(16)、(17) *Ibid.*, p. 18.
- (18) *Ibid.*, p.19.
- (19) *Ibid.*, p. 22.
- (20) Cf. Takenori Oku. 'The Paradox of Democracy' in *The Mainichi Shinbun*.1998. 3. 5.
- (21) D. H. Lawrence. 'Apocalypse' p.147, in *Apocalypse and the Writings on Revelation*. ed. Mara Kalnins. Cambridge: Cambridge U.P., 1980.
- (22) *Ibid.*, p. 65.
- (23) Cf. Virginia Woolf. *Mrs. Dalloway*. Penguin, 1992. p.110.

(こが まさかず 英語英米文学科)

2002年10月16日受理